

## 講演会

April 1999



### ボスニア・ヘルツェゴビナ

### 及び旧ユーゴ諸国の情勢について

ベンジャミン・A・マーキン駐日ボスニア・ヘルツェゴビナ大使



●写真中央がマーキン大使

去る3月20日、東医健保会館で MRA 講演会が開催され、ベンジャミン・マーキン駐日ボスニア・ヘルツェゴビナ大使より、ボスニア・ヘルツェゴビナの現状と旧ユーゴスラビア諸国の情勢についてお話を伺いました。今回はその講演の要約をご紹介します。

#### ●ベンジャミン・マーキン氏プロフィール

1939年ガーナに生まれる。63年より、旧ユーゴにて留学生として医学を学んでいた時にMRAに出会う。以来、外科医としてユーゴで働き、84年、ユーゴに帰化。特に、旧ユーゴの解体に伴う内戦に際しては、厳しい環境の中で数少ない医師の一人として奮闘。97年ボスニア・ヘルツェゴビナの外務省より初代駐日大使として赴任して欲しいとの要請を受け、外交官としての研修を受けた後、98年12月に来日。

「近隣諸国との歴史を語ることなく、ボスニア・ヘルツェゴビナについて語ることは非常に難しいことです。この地域はバルカンとして知られていますが、現在、ボスニア・ヘルツェゴビナには、ムスリム人、セルビア人、クロアチア人など、それぞれ歴史的、宗教的背景の異なった民族が、それぞれ違った考えをもって、この地域に共存し

#### ■主な内容■

##### ◆ MRA 講演会・1-3P

・「ボスニア・ヘルツェゴビナ及び旧ユーゴ諸国の情勢について」

ベンジャミン・マーキン駐日ボスニア・ヘルツェゴビナ大使

・「自分自身からのスタート」

##### ◆ 汚職撲滅に向けて・4P

##### ◆ 1999年度コー世界大会のご案内・5P

##### ◆ MRA ワールドニュース・6-7P

・クリーン・ケニア・キャンペーン (ケニア)

・西暦2000年プロジェクト

・第8回アジア・太平洋青年会議 (インド)

・スタディーコース便り (インド)

##### ◆ 事務局通信・8P

##### ◆ 別紙 / 第8回アジア・太平洋青年会議参加体験記

ています。ムスリム人はクロアチアから来たという人もいますし、クロアチア人を見てセルビアから来たという人がいますが、ムスリムの人とはムスリムの人なのです。それぞれのグループが抱えている問題、利益といったものも違いますが、ボスニア・ヘルツェゴビナで起きたことは最悪の悲劇ともいえます。そして、今、その悲劇の再来をユーゴスラビアのコソボで私たちは目撃しているのです。コソボはもうひとつの時限爆弾といえるでしょう。

私はチトー大統領によって支配されていた時代に、旧ユーゴスラビアにやってきました。その後様々な経緯を経て日本に参りましたが、残念ながら、フランク・ブックマン博士が言われた4つの真実の力、絶対正直、純潔、無私、愛といったものがあまり見受けられない地域から私はやって参りました。私とMFAとの最初の出会いは学生の時でした。私は友人の紹介でMFAのことを知り、当時スイス・コーのMFAセンターにいたコールフィル氏に手紙を書き、コーを訪れました。そこで私が見つけたものは、まさに私が求めていたもの、それまでの私の人生になかったものだったのです。その後、私はクロアチアのザグレブにいたアーチ・マッケンジー氏にもお会いしました。彼は私だけではなく、多くの学生たちに、非常に親切に様々な面で援助をして下さいました。私の後もスイスのコーを訪れた多くの若者を私は知っていますが、彼らは現在、世界各地において様々な分野で活躍しています。

## 中世の歴史、外国による支配

ボスニアの歴史について簡単にお話したいと思います。7世紀初め、南西のポーランドの方から、また東ドイツの方からこの地に勢力が侵攻してきます。この地域の人々は、その後も様々な敵国と戦いながら生きてきました。

1368年、オスマン・トルコ勢力がこの地域へ向けて侵攻してきますが、セルビアは王国の存亡を賭けてオスマン帝国と戦います。その場所がコソボだったのです。この戦争は“コソボの戦い”としてセルビアではよく知られています。しかし、この戦争でセルビアはオスマン帝国に敗れ、セルビア領土を征服されます。その後、400年にも及ぶオスマン朝支配

の後、オーストリア＝ハンガリー帝国によって征服され、オスマン帝国は撤退しました。それによって、ボスニアはオーストリアの支配下におかれるのです。

そして、1912年から1913年の二度のバルカン戦争の後、第1次世界大戦が勃発し、オーストリアが撤退しました。最初のユーゴスラビア王国の誕生です。そして、1918年、第1次世界大戦が終了した後、ボスニアはユーゴスラビア連邦の一部となります。その後ボスニアは「クロアチア独立国家」に編入されますが、それは僅かな期間でした。そして、1943年チトーを指導者とするパルチザンが第2のユーゴスラビア連邦建設を進め、1945年の第2次世界大戦後に、ボスニアは社会主義ユーゴスラビアを構成する共和国の一つとなりました。

## チトーの死後

チトーの死後、選挙が行われましたが、これは非常に重要なことでした。それはこの選挙によって全ての人々の生活が変わったからです。この選挙によって共産党がセルビアとモンテネグロを除き、マケドニア、ボスニア・ヘルツェゴビナ、クロアチア、スロベニアで敗れました。しかし、それによって、ユーゴスラビアが連邦国ではなくなり、それぞれが独立した国家連合になるということを、政府は認めようとはしませんでした。そして、その後起きた戦争、内乱は、我々が現在テレビなので目にしている現状へと繋がっています。

最初にスロベニアが独立を宣言し、その後クロアチア、ボスニア・ヘルツェゴビナへと独立運動が広がって行きました。ボスニアでは、目を覆うような悲惨な行為が多くの人々によって繰り返し行われました。アメリカを初め、ヨーロッパ諸国、そして国連が、ここで何かをしなければならぬと気づくまでに随分時間がかかったわけです。それまでに多くの人が虐殺され、丁度皆様のご存知のような状態が起きていました。非常に複雑に錯綜した問題であるため、容易な答えというものはありません。

1995年、アメリカのデイトンで締結された和平協定によって、92年以来3年間続いたボスニア紛争は一応終結しましたが、現在もボスニア・ヘルツェゴビナでは様々な破壊が



# Start With Yourself

次の言葉は、ウエストミンスター寺院の聖堂地下室にある英国教会の、ある司教の墓に刻まれているものです。

## 自分自身からのスタート

私はまだ若くて、自由と無限の想像力があつた頃、世界を変えることを夢見ていた。しかし、私も成長し分別がつくにつれ、世界は容易に変えられないものだということが解り始めた。

私は自分の視野を幾分縮め、自分の国だけでも変えようと考えた。しかし、これもとても出来そうにはなかった。

老境に至って、私は最後の必死の試みとして、自分に最も近い私の家族だけでも変えることで満足を得ようとした。だが、悲しいことに、そのうちの一人すら変えることが出来なかった。

私は、今や死の床に横たわり、もし私が最初に私自身を変えていたら、私の家族たちも変わっていたかもしれない、ということに突然気が付いた。

こうした気づきがあれば、祖国をより良い国にすることが出来たかもしれず、世界すら変えることが出来たのかもしれない...

死の間際に、自分自身を変えていたらと後悔するのでは、余りに残念です。そうならないために、今、ここで自分の変えるべき点を勇気をもって改めようというのがMRAの考え方です。

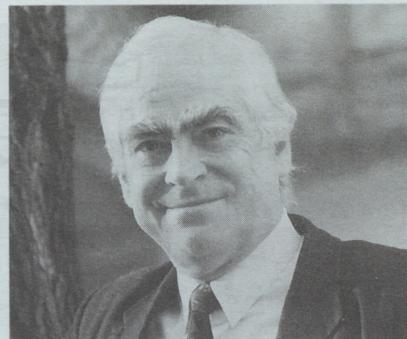
行われ、たくさんの地雷もうめられたままの状態です。戦争によって手足を失った人々もいます。そして、人々には仕事がありません。こうした中に無力感というものも生まれています。また、この戦争によって国外へ脱出して暮らしているボスニアの人々が大勢いますが、今でも故郷へ戻れない人たちが多いいです。こうした人々に、住居や仕事が供給されない限り、彼らがボスニアに戻ることは出来ません。もし、若い人たちがどんどん国外へ出ていけば、自分たちの国を発展させていくことは出来ません。お年寄りの人たちだけでは、国家の再建は難しいわけです。それが今、我が国が抱えている非常に大きな問題です。

また、これとは別に重要なことは、人々が戦火をくぐり抜けて、その中から人々の心の中に敵対心、憎悪といったものが生まれてきているということです。戦争による残虐性、悲惨さというものは簡単に忘れることはできません。妻や夫、そして子どもを失った人々にとって、こうしたことを全て忘れ去ることはできないでしょう。しかし、忘れられないとしたら、それもまた悲劇だといえます。つまり、なぜボスニアで悲劇が起きているかという、人々がこうした憎しみや敵対心といったものをぬぐい去ることができないという点にあるからです。こうした悲劇は、昔、既に同じ場所で、何度も繰り返し起きてきているのです。このような事実を子どもたちに伝えていけば、当然その歴史というものがくり返されていく訳ですから、こうした問題に対して何とか対処していくことが大切だと思います。

私はMRAの精神というのは非常に大切だと思います。特に悲劇をくぐり抜けているボスニア・ヘルツェゴビナにおいて非常に重要でしょう。皆様には、この日本でMRAを通してどのように道義心というものを培っていくかということをご考慮していただきたいものです。そして皆様が次回このMRAの会合にいらっしゃる時には、ぜひ若い人たちを連れてきて下さい。常にここに来る必要はないかもしれませんが、ここでどういうことが語られているかを聞くことが非常に大切なことだと思います」

# 汚職撲滅に向けて

## OECD(= 経済協力開発機構)の 汚職撲滅協定を支援して



●ピーター・アイゲン氏

### トランスペアレンシー・インターナショナル

先進工業国の実業界とその不正な後援者（発展途上国政府関係者）が絡んだ国際的な汚職行動撲滅運動を積極的に推進したのは、ベルリンを本拠地とする非営利団体「トランスペアレンシー・インターナショナル（TI）」（以下：TI）である。

この組織は6年前に世銀の元幹部ピーター・アイゲン氏が設立。氏は、東アフリカ駐在時、不適切な開発プロジェクトに注がれる多額の資金の浪費ぶりを見て愕然とし、その後世銀を退職してTIの設立を決意した。

アイゲン氏はケニア駐在の前に、南米の世銀の部長であった。その頃世銀は、汚職を銀行内部の問題というより、企業や相手国の問題として「変えることのできない、避けて通れない現実問題として汚職を受け入れていた」と氏は述べる。

TIは、毎年世界で最も贈収賄の激しい国々の「汚職に対する認識度指標」を発表している。これは一連の独自の調査をまとめたものである。現在はカメルーンが最下位、デンマークが85カ国中最も汚職の少ない国として上げられている。氏は、この指標は政治家にとって汚職減らしの“目覚まし時計”の役目を果たしているが、あくまで認識度の指標であり、事実や全体像を表しているものではない、と語る。途上国の中には、もし先進国の企業から不正利得のための誘惑を受けなければ汚職の頻度はずっと少ないところもある。また氏は、先進国の仲介役が率先する汚職が余りに多すぎる、と指摘する。彼らは通常首都近郊に住み、ゴルフコースをよく訪れる閣僚たちを掴まえて、その子弟をオックスフォードやハーバード大学への入学に便宜を図ろうと誘いをかける。英国のビジネスマンのT・ローランド氏はアフリカ

各国の大統領の家族との付き合いに、年間1千万ポンドが必要だったと闘争中の法廷で述べている。

現在TIは、賄賂を行う側の企業が所在する国々にスポットライトを当てようと別の指標を作成中。ドイツ、英国、日本、スカンジナビア等は常にリストに名が上がる。途上国の収賄より先進国の賄賂を取り締まる方がはるかに困難である、とアイゲン氏は断言する。またTIは、契約入札で競争する企業と関係政府が合同で汚職を行わないことを誓う、「クリーン条約」を締結してはどうかと提案する。アルゼンチン、パナマ、エクアドルでは1994年に上記の方法で石油精製プラントの改修入札を実施した。TIでは、すべてのドナー国にこのような概念を導入し、また、世銀がアフリカ6カ国にこうした概念を導入できるようにバックアップを行っている。

汚職が完全に無くなるとは誰も思わないであろう。途上国の公務員の中には所得が余りに低いために、家族が生き残るための手段として賄賂を受け取ることが、その地方固有の風土病となっているところもある。しかし、アイゲン氏が憤激するのは国の元首や政府閣僚を含む大規模な贈賄である。「彼らはおそらく世界で最も金持ちでありながら、その富をどのように用いてよいのか解らない人たちである」と語る。

汚職と闘うことと負債の軽減は表裏一体であるとみなすことができる。アイゲン氏は途上国の国際負債を帳消しにすることに懐疑的である。負債を抱えながら、これ以上負債を増やしてはならないというある種の緊張感を持ち続けて欲しいのである。彼らの投資プログラムに抑制がなければ、彼らは今後も無責任に借り続けることになるだろう。（MRA機関誌「フォー・ア・チェンジ」より一部抜粋 翻訳：中島信子）

## CAUX

## 1999年度コー世界大会のご案内

総合テーマ

## 心のわだかまりを捨てて — 新たな出発への誓い

## 2000年を間近に控えた最後の世紀

今世紀は大きな矛盾が世界中で噴出し続けた100年でした。【人権意識の高まり】対【地域社会や国という考え方の喪失】、【通信手段の急速な進歩】対【人間関係・家族関係の崩壊】、【和平構築への努力】対【戦争や殺戮】、【技術の進歩】対【富の遍在や貧困の拡大】など。今年のコーの会議では、次ぎの1000年に向けて、人生の目的や方向を見直し、より良い未来を創造するための方法を模索していきます。



## プログラム

今年は以下の会議が行われますが、原則として1つの会議を通してご出席下さい

- ◆ 「心のわだかまりを捨てて - 新たな出発への誓い」 7月10日～16日  
 世代や文化の異なる様々な人々との対話を通じ「何が正しいか」について考えます。原点に立ち返ることが新しい考え方を生む力となります。
- ◆ 「産業人会議」 7月19日～24日  
 次の世紀の新たな課題は何でしょうか？グローバル経済に目新しい課題はありませんがグローバリゼーションの脅威は現実に存在し続けています。私たちは受け身ではなく能動的に様々な課題に取り組み新しい世紀に向けて変革をもたらす努力をしなければなりません。
- ◆ 「都市問題コンサルテーション」 7月30日～8月5日  
 様々な人種、言語、宗教、文化を抱える都会。そこに暮らす人々が健全なる地域社会を創造して行くためには何をすべきかについて話し合いを行います。
- ◆ 「和解のための鍵を求めて」 8月8日～15日  
 このセッションでは、様々なレベルで和平構築に取り組んでいる方々が、お互いの経験を語り、共有し合います。また共存への努力を阻害する腐敗の防止や信頼確立へ向けた地道な努力について対話を行い、経験を共有して行きます。
- ◆ 「21世紀を見据えて、新たな目標や価値観を探るための会話」 8月17日～22日  
 汚職、精神や環境の汚染防止への取り組みについて、参加者がお互いの経験を共有し合います。

インターネットアドレス <http://www.caux.ch>

## 世界のMRA- 最近の動き

# MRA World News



### ケニア



## クリーン・ケニア・キャンペーン



1992年から台湾のMRA協会が主導して始まった選挙浄化運動に触発され、最も汚職の目立つ国の一つとみなされていたケニアでも、97年の議会選挙に向けて、MRAの選挙浄化運動が展開されました。賄賂の授受をしないよう呼び掛けるのを初めとした、公明な選挙をうながす60万

枚のパンフレットが全国に配られ、数千人の人々が賄賂の授受をしないという文書に署名したというだけでなく、キャンペーンに啓発されたという人々により、高潔な人格で知られる人々が立候補を要請されました。又、投票箱を守るために何千人という人々が各投票箱保管所に泊まり込むなど、普通の人々が初めて汚職に対して立ち上がったという意味で画期的なものとなりました。

この選挙浄化キャンペーンを更に発展させて欲しいとの人々の声に応じて、今年1月10日に、ナイロビの大聖堂に3千人が集まり、クリーン・ケニア・キャンペーンがスタートしました。汚職、貧困、部族間の衝突、家族の崩壊、環境の悪化、犯罪、そしてリーダーシップの欠如といったことを克服した強く、融合したケニアを作ろうと呼び掛ける百万枚のパンフレットを新たに用意し、次の様な内容の文書に署名して行動するように全国の人々に働きかけ始めています。

- ① どんな環境下においても、いかなる賄賂の授受もしません。
- ② 神が多様な部族を創造されたことに感謝し、この多様性にこそ我々の国のすばらしさが存すると認めます。
- ③ ストリート・チルドレンなどを生まぬよう、仲の良い家族の関係を作ります。常に正直さと純粋な気持ちを保ちます。
- ④ 道路にゴミを捨てませんし、以前よりきれいにしよう心がけます。植林と資源保護キャンペーンに協力します。
- ⑤ どんな環境下においても、いかなる犯罪にも与しませんし、犯罪の解決に協力します。どんな理由があっても暴力を行使しません。
- ⑥ 高潔な人格の人々にいつも投票するとともに、そのような人々に立候補してもらおうよう勇気づけます。



## 西暦2000年 プロジェクト

西暦2000年の9月から2004年までの5年間にわたり、若い世代を対象とした国際的プログラムがMRA国際チームを中心に現在計画されています。

この西暦2000年プロジェクトは、21世紀へ向けた青年たちのリーダーシップの開発とMRA活動の更なる前進を目指して、1年間にわたり、様々な講演やセミナー、そしてフィールドワークを通し、産業、政治、教育、環境など様々な分野の問題に対して理解を深めるための機会が提供されます。

このプログラムは、3段階からなる1年間のプログラムで構成され、インドのMRAセンター、アジアプラトールに各国のMRAから推薦を受けた20歳～40歳までの男女約30名を招聘し、3ヶ月の研修を実施した後、インド各都市で3ヶ月間のフィールドワークを行います。その後小グループに分かれ、各国の要請に従って6ヶ月間各国・地域を訪問し、個々の世界的視野を広げると共にこれからの生き方の指針を学びます。

今年の6月には、リュウ・レンジョウ氏（台湾MRA協会理事長）がこのプロジェクトのPRを兼ねて日本を訪れる予定です。

インド



第8回アジア・太平洋青年会議

調和のある21世紀の創造を目指すための対話



古い歴史と豊穡な文化、そして勤勉さを備えた様々な民族が集まるアジア太平洋地域 — この地域はまた、数え切れないほどの苦痛、悲惨さ、そして苦難をも経験してきました。善意を持った人々さえ自己利益と近視眼的見方のために、しばしば仲違いをしてきたのです。20世紀という動乱の舞台に永遠の別れを告げ、目的とパートナーシップを持って21世紀に歩を進めることができるのでしょうか？

アジア・太平洋青年会議 (APYC)

APYCはこれまで、国境を越えた青年同士の友情のネットワークを作ることを目指して、台湾(1990~92年)で初めて開催されて以来、香港(1993年)、マレーシア(1994年)、フィリピン(1995年)、日本(1997年)等で開催されてきました。会議では、自分自身のこれまでの人生に対する姿勢や生きる意味を見直すことをきっかけに、人類全体への関心と思いやりをもちながら、講義、分科会、音楽、ドラマ、スポーツ、文化の夕べ等様々なアプローチを通して、相互理解の促進をはかると共に、個人レベルの問題から、国家的規模に至る問題までその解答を模索してきました。

7ヶ国、41名の青年たちが参加

昨年12月28日から1月4日にかけて、インド、パンチガーニのMRAセンター、アジアプラトーで第8回アジア・太平洋青年会議(APYC)が開催されました。

この会議では、多様な民族、文化、宗

インド



スタディーコース便り



インドでは、1月8日から2月10日にかけて、若い人達を対象にしたトレーニングコース「Daring to Live Effectively (あえて効果的な生き方を選ぶ)」が行われました。

参加者は7カ国から来た30人。コースでは、自分のこれまでの生き方や価値観について考え、今後の生き方を模索するための時間も与えられました。互いの状況について学ぶ機会も設けられ、内戦で多くの友人を殺されて、自分達も逃亡や過酷な投獄生活

を余儀なくされたというスリランカの参加者の体験談には、多くの参加者が涙しました。2つのグループに別れたフィールドワークでは、実際に社会に貢献している人々に会う機会に恵まれました。貧しい人々のために尽くしたいと決心した医師夫妻が、移住先の米国からインドに戻って、僻地の村で福祉や保健医療の活動を開始し、それが大規模な運動に広がっていった様子に勇気づけられ、職業訓練を受けた若者や手に職を得た視覚障害者が、自分に誇りを持って自立している姿に感動しました。参加者達は、これからは自分の過ちを認め、自分と人を信じ、さまざまなことにチャレンジできるような人生を選択することを決心して、それぞれの国へと帰っていきました。(報告者：高橋千恵)

教を包含するアジア太平洋地域において、お互いの理解を深めると共に、21世紀に向けて、この地域の青年たちが世界の融和のために共に働いていくには何をすべきかを学ぶことを目的として開催されました。1990年に台湾で初めて開催されて以来8回目となった今回の会議では、「環境倫理における自分の役割」、「他の宗教・地域、人種への理解」、「人生の意義、家族・家庭の在り方」、「メディアの責任と在り方」等々、様々なテーマでの講演や話し合いを初め、多彩なプログラムが用意されました。

参加者は、日本から岩佐長子さん（労働組合専従）、鈴木里佳さん（塾講師）、塚本真由子さん（神戸大大学院在）、初瀬川孝夫さん（中学校教諭）、保

坂陽子さん（青山学院高等部講師）、長野清志（MRA事務局）の6名に加えて、韓国、台湾、マレーシア、カンボジア、オーストラリア、そして開催国のインド各地からの青年たち、計7ヶ国41名が参加しました。多くの問題を抱える北東インドからの参加者から、それぞれ状況を変えるために先ず、自分自身の生き方を変えるという決意が述べられた他、職場での悪い慣行を改める、両親との関係改善への決意が述べられました。また日本の青年たちの発展途上国への援助活動や関心の深さが、インドを初め参加各国の青年たちに大きなインパクトを与えました。

**※第9回アジア・太平洋青年会議は今年の7月22日から8月1日まで、台湾の台南市で開催されます。**

## 事務局便り

### ●南アフリカでMRA世界連絡調整会議開催

去る3月5日から12日まで、南アフリカに22ヶ国から37名が集まり（日本から事務局の長野が参加）MRA世界連絡調整会議が開催されました。

今回は世界各地で繰り広げられているMRAの様々なイニシアチブの評価・検討がなされました。又、本年7月より新設されるMRAの世界的活動の調整と推進を図るための国際評議委員会のメンバーの選出も行われました。

●今回、紙面の都合上、コー円卓会議、環境問題に関する記事はお休みさせていただきます。



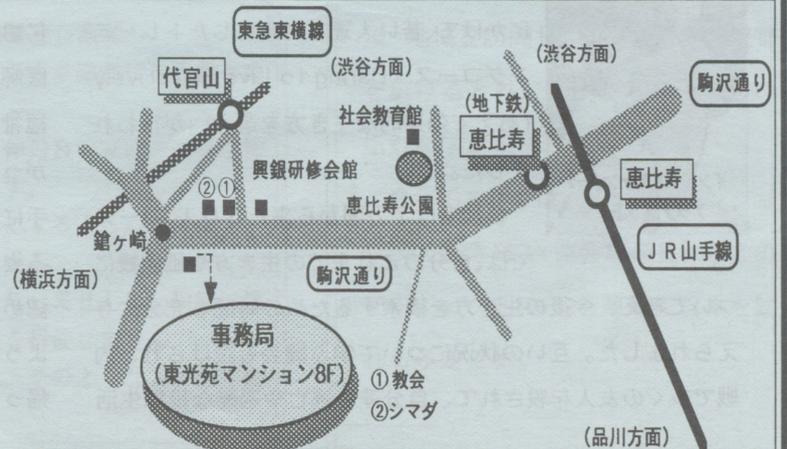
1999年度の主な活動予定			
5月	日本	第22回MRA国際会議	5月22日~23日
7月	台湾	第9回アジア・太平洋青年会議	7月22日~8月1日
8月	スイス	コー世界大会	7月10日~8月22日
	スイス	コー円卓会議	7月21日~24日
10月	日本	第22回関西秋季大会	10月16日~17日

## 国際MRA日本協会 事務局案内図

〒150-0022 東京都渋谷区恵比寿南 3-7-5  
東光苑マンション802  
TEL:03-5721-6861  
FAX:03-5724-6880  
E-MAIL:LEB03055@niftyserve.or.jp

### ●最寄駅

- JR山手線 : 恵比寿駅西口下車 徒歩7分
- 地下鉄日比谷線 : 恵比寿駅5番出口 徒歩5分
- 東急東横線 : 代官山駅 徒歩4分
- 東急東横線 : 中目黒駅 徒歩5分



# 第8回アジア・太平洋青年会議 (APYC) 参加体験記

## 参加体験記①

塚本 真由子 (神戸大大学院在)

私がこの会議に参加した理由は、今、就職活動という時期にも重なり、自分が本当にやりたいことは何なのか、そして自分自身を見つめ直したかったことです。今まで、その“自分を見つめ直す方法”がわかりませんでした。しかし、今回この会議を通じてその方向性を見出すことができました。それは“静かな時間”を持つことと、インスピレーションを与えてくれる話や本との出会い、そして分かち合うことが必要であるということです。

### マザーテレサの言葉

マザーテレサの言葉に「毎日自分のところを空のカップのようにしなさい。ところがいっぱいだと自分の事しか見えなくなります。あふれれば分かち合いなさい」というのがあるそうです。忙しさに負けて頭が



●すっかり仲良くなった各国の参加者たちと一緒に記念撮影  
(右から2人目が塚本真由子さん)

パンク状態になることが時々あります。そうした時は、ついつい人に当たってしまったり、そういう自分が嫌になって憂鬱になったり、特に去年はそんなことがありました。忙しいと言って逃げている時も確かにあったと反省しています。“静かな時間”とは、そんなどうしようもない飽和状態のころを空っぽにするための時間であると改めて思いました。

ある講演で“自分がいかに幸せであるか考えてみなさい”と話していました。確かに私は健康で、家族の仲もまあまあ良く、御飯も食べられ、学校にも行けてとても幸せで感謝しないといけないと思いました。参加者の中にアッサムから来ていた人がいましたが、勉強不足の私にはアッサムといえば紅茶が世界的に有名なので、のどかで平和なイメージがあったのですが、実はバングラディッシュからの移民が増加し、もともと彼らの土地であったのに、今では彼らがマイノリティーとなり、その反発でテロなど政治的不安定な状態が続いていると知った時は大変ショックでした。これに対して私は直接は何もできませんが、手紙を書いて応援することはできるので、是非そうしてアッサムのことをもっと知っていきたくと思いました。

今回友達になった一人に、将来やりたいことがあるが具体的にどうすればよいのか分からず迷っている、という人がいました。私と同じ悩みをもち、また大学の専攻がお互い近いこともあって、農業についていろいろと話をしました。するとだんだん夢が大きく

膨らみ、将来は一緒に貿易会社を作ろうかなんて大きな話に発展し、とても楽しかったです。会社の件はさておき、こんな頼もしい友達を得られたことは本当に幸運であり感謝しています。

人との出会いとは大切であり、素敵なものだと思ってきました。人と出会うこと、それだけでもお互いに何かを与え、与えられていることに気づきました。友達を、家族を、そして自分を、もっと大切にしていきたいと思いました。

## 参加体験記②

鈴木 里佳（塾講師）

### 初めてのAPYC 参加

今回、インドでAPYCを開いたことはとても有意義なことであった。インドは北と南では人種が違い、内戦やテロ活動も行われている。インド国内でさえ、18の公用語が数えられ、顔立ちも宗教も違う人々がデリケートな問題を抱えて暮らしているのである。そんな中、近くはボンベイから、遠くは遙かアッサムからのAPYCのためにインドの人たちが駆けつけた。ボンベイからパンチガーニはバスで8時間。アッサムからの人たちはなんと電車で片道4日もかけて会議に来てくれた。そして緊張の続くナガランドからも女性が二人参加した。

私にとっては初めてのAPYC参加であったが、今回集まった人たちは皆心を開いて話してくれた。実質滞在したのはたった1週間であったが、すぐにうち解けて仲良くなった。これほど短期間のうちに友情が結ばれ、何人かの人たちと深い話ができただけは、私にとって経験のないことであった。相手が自分の話を分かってくれる人間かどうかを疑わず、すぐに話を本題

に持っていくことができた。そして、今回のAPYCに参加した目的の一つも達成できたように思う。それは、日本には出会えない民族の人たちと語り合い、彼らの体験を共有することである。もちろん、もっと時間をかけて多くの話を伺いかけたが、想像していた以上の収穫があったように思う。

また、今回私が疑問に思っていた宗教、民族対立の壁を壊せるのかといったことについても一応の解答が得られた。これは非常にデリケートな問題で、一朝一夕には解決できないが、解決の可能性はあるように思った。特に北と南の人が、同じ人間としてお互いの話を聞き認め合えば、友情も芽生えるし、未知の相手に対する恐れを抱くこともなくなるであろう。このことは、私の選択した芸術のクラスでの話し合いから感じられた。

芸術を選択したメンバーは、台湾、アッサム、ブネ、ボンベイから来た人たちと日本人の私で、「他人からみた自分自身」のタイトルで作品を作ることになった。その趣旨はみんな一致した。それは、外見や文化、言語がいかにか違おうとも、人間としての根っこの部分は共通しているというものである。つまり、人間として本当に求めているものはどこの国の人でも皆同じであり、皆平和を求めている隣人との争いなどしたくない、ということだ。外見ばかりに気を取られないで中身を見てみると、我々には本質的な違いなどないのである...私にとって、インドのAPYCに参加できたことは何事にも代え難い財産となった。



●キッチンで仲間と一緒に汗を流す鈴木里佳さん（右）